

## 第4室 調度 展示解説

### N-88 鳳凰円文螺鈿唐櫃（ほうおうえんもんらでんからびつ）

唐櫃（からびつ）は収納のための箱。特に脚をつけることで、箱本体を宙に浮かせたものを指す。この唐櫃は、蓋の表や箱の身、脚に厚い夜光貝の螺鈿（らでん）によって鳳凰の文様が表わされている。螺鈿とは貝殻の内側にある真珠層を板状に加工し、これを切り抜いて漆にはめ込む技法である。

鳳凰は左右の翼を広げて尾羽を丸めた円形の姿にデザインされている。鳥の内側部分の漆には細かな金粉が蒔（ま）かれ、それによってほんのりと鳳凰が浮き上がるような効果を生んでいる。大胆で大きな文様が放つ白く上品な光は、漆の艶やかな黒に映え、平安時代に洗練された日本的な美意識をここに見ることができる。

### N-90 瑞花蝶鳥金銀絵漆皮箱（ずいかちょうちょうきんぎんえしっぴばこ）

### N-301-1 草花蝶鳥金銀絵漆皮箱（くさばなちょうちょうきんぎんえしっぴばこ）

素地となる牛、鹿、猪などの皮をなめしてから木製の型にあて、強く張りのばして作られた箱。表面には黒漆や透漆を塗って仕上げている。法隆寺献納宝物には合わせて7件の漆皮箱（しっぴばこ）が含まれており、そのうち4件には金銀絵で瑞花蝶鳥や草花などの文様が描かれている。漆皮箱の製法は唐から伝わり、奈良時代には「ぬりのかわばこ」と呼ばれ、盛んに作られた。しかし、形がくずれやすいために、しだいに木製素地に移行していったらしく、遺例が少なく、わが国の漆芸の歴史をたどる上で貴重な資料となっている。

### N-116 火取水取玉（ひとりみずとりたま）

### N-117 石名取玉（いしなとりだま）

鎌倉時代の『古今目録抄（ここんもくろくしょう）』（N-18）に「五歳六歳御持物、水精、琥珀、石取、水瓶形、双六調度形、露形、水火共取玉最大也」と記されるもので、当時は聖徳太子幼少の頃の愛玩品と伝えられていた。火取水取玉には網状の組紐が付属していることから装身具として使われたらしく、また屈輪彫漆合子に納められた石名取玉は双六などのゲームに使われたように考えられる。いずれも天保13年（1842）の『御宝物図絵追編』に図があり、ことに火取水取玉のほうは、「花形皿」（N-118）にのせられて描かれている。

### N-118 花形皿（はながたさら）

低い高台（こうだい）をつけた、6弁の花形にくり込みのついた皿。内面に鍍金（とぎん）を施し、底には透漆（すきうるし）を塗り、高台は蠟（ろう）付けしている。

### N-92 高燈台（たかとうだい）

台座・支柱・反射板の3部からなる燈台。反射板中央の高さを調節できる鉄製の輪の上に、灯明皿をのせて用いる。反射板は光を反射させるために白く胡粉地に仕立て、3人の稚児を描いている。その姿は巻物を広げて見るもの、筆をとるもの、うつ伏して眠るものと三者三

様に愛らしい。「眠り燈台」という俗称は、この居眠りする稚児に由来する。

#### **N-121 青磁四耳壺（せいじしじこ）**

天平6年（734）に光明皇后が法隆寺に献納された「丁子（ちょうじ）」とよばれる香料の容器として法隆寺に伝来した。来歴が明らかな世界最古の伝世陶磁器として名高い。中国南部産の青磁であり、丸みをおびた軽快な器形から、唐時代前期に製作されたものと考えられている。

#### **N-99 獅子蛮絵摺板（ししばんえすりいた）**

獅子の丸文を両面に彫り出した版木で、これに墨を塗り、布をあてて文様を摺り表わすのに用いられた。蛮絵の語は円形にかたどった文様のこととも、蛮国から唐に伝えられた女楽の服の文様のことともいわれる。文様には獅子のほか、熊・尾長鳥・鴛鴦などの禽獣が表されることが多く、下級官人の舞楽装束の袍（上着）などに用いられた。

#### **N96～N98 撥鏤針筒（ばちるのはりづつ）**

象牙を轆轤挽（ろくろびき）により印籠蓋造（いんろうぶたづくり）に仕立てた円筒形の容器。それぞれの筒の表面には、鳥獣や草花などの文様を撥鏤の技法で表している。撥鏤は色染めした象牙の表面を刀で撥（は）ね彫りして文様を描く装飾法。天保13年（1842）の『御宝物図絵』では、紅牙撥鏤尺（こうげばちるのしゃく）（N83）とともに聖徳太子が仏像の袈裟（けさ）をつくる時に用いたものとしている。